

## 行脚修行を通して伝わる 「神仏の慈悲」

今月号から再び、「行脚記」の話を進めていきたいと思えます。

さて今月号で訪れるのは、奈良県は吉野山『金峯山寺』きんぷせんじ（金峯山修験本宗の国軸山総本山金峯山寺）です。

国土の7割を山地が占める日本において、山は古くから聖なる場所とされてきました。中でも奈良県南部の吉野・大峯（おおみね）や和歌山県の熊野3山は、古くから山岳信仰の霊地とされ、山伏（やまぶし）、修験者などと呼ばれる山林修行者が活動していました。

吉野山と言えば、『これはこれとはばかり花の吉野山』と貞室が詠んだように、全国的に桜の名所（吉野の桜）として有名です。4月の上旬から中旬にかけて、現在2百種、約3万本ともいわれるシロヤマザクラが、尾根から谷を埋め、爛漫と咲き誇るその見事さで広く知られる山ですから、1度は桜見に出掛けられたという方もおられるかも知れません

ね。多くはシロヤマザクラですから、若葉と同じくして開花し、凜とした気品が感じられる桜の景観として親しまれています。

ここで簡単に、吉野山についてのご説明をさせていただきます。と言つのも、吉野山というのが、どういう場所なのかを読者の皆様に知って頂くことで、より臨場感が伝わると思えますので、少しの間お付き合い下さい。

日本全国にある多くの桜の名所では、近代になってから桜並木を整備したり、古くからある古木を大切に保護したり、いわゆる「花見」のために桜を植栽・管理しています。しかし、吉野山の桜は、そんな「花見」のためではなく、山岳宗教と密接に結びついた「信仰の桜」として現在まで大切に保護されてきたのでした。その起源は今から約千3年前にさかのぼります。その当時は、山々には神が宿るとされ、吉野は神仏の住む理想郷として認識されていました。のちに 修験道の開祖と呼ばれる 役小角（えんのおづぬ）＝役行者（えんのぎょうじゃ）は、1千日といわれる荒修行の果てに、憤怒の形相もおそろしい 蔵王権現（ざおうごんげん）を 感得（かん

とく）し、その尊像こそ濁世の民衆を救うものだとして、桜の木に蔵王権現を刻み、これを吉野山と、その南方20数キロの大峯山系に位置する 大峯山、山上ヶ岳（おおみねさん、さんじょうがだけ）と吉野山に祀ったとされています。その後、役行者の神秘的な伝承と修験道が盛んになるにつれて、本尊を刻んだ「桜」こそ「御神木（ごしんぼく）」にふさわしいとされ、

またそれと同時に蔵王権現を本尊とする金峯山寺への参詣もさかんになり、御神木の献木という行為によって、信者達が植え続けられました。

「金峯山」とは、単独の峰の呼称ではなく、吉野山と、山上ヶ岳を含む山岳霊場を包括した名称であります。吉野・大峯（よしの・おおみね）は、古代から山岳信仰の聖地であり、平安時代以降は霊場として多くの参詣人を集めてきました。吉野・大峯の霊場は、和歌山県の高野山と熊野三山、及びこれら霊場同士を結ぶ巡礼路とともに世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の構成要素となっています。

と言つ事ではざざと、ここまで吉野山の輪郭をご説明してきました。難しい言葉のオンパレードだったかもしれ

ませんが、何となく吉野山というものが見えてきましたか？「難しくても全く意味も分からない」という方もおられるかも知れません。そんな方には、こうご理解頂ければと思います。

吉野山から大峯山山上ヶ岳にかけての1帯は古くは『金峯山』と呼ばれ、古代より世に広く知られた聖域だった。そして現在、吉野山は桜の名所であり、その桜は信仰の力によって三万本という植樹がなされ、遂には世界遺産に登録されるまでになったということです。その信仰の力を支えたのは、吉野山を守護している『蔵王権現』という神仏様の後押しがあつたということ。その蔵王権現は、役小角（役行者）という山岳修行者が1千日の修行をして感得されたということ。

明治七年（1874年）、明治政府により修験道が禁止され、金峯山寺は一時期、廃寺となり復職神勳しましたが、同19年（1886年）に天台宗末の仏寺として復興。昭和23年（1948年）には、蔵王堂（国宝）を中心に、金峯山修験本宗が立宗し、その総本山として今日に至っています。「国軸山」というのは

山号で、宇宙の中心の山という意味があります。私達日蓮宗の総本山は「身延山久遠寺」と言うでしょう。身延山というのが山号になって、久遠寺が寺名になります…と、簡略して書こうとしましたが、かえって難しくしてしまっただかもしれません…。申し訳ありません(苦笑)。

まあいずれにしても、民衆の信仰心が千3年の時を経て『吉野山』という山を創り、現在も息づいている場所だということです。私個人の意見としては、身延山の七面山(しちめんざん)に次ぐ、素晴らしい信仰のお山であると確信している場所でもあります。と言うのも、そんな確信を得る体験を、この『吉野山』で経験することになりました。今月号は、ご説明のみで読みづらかった事と思いますが、紙面の関係上、その体験記は来月号に記すことにしますので、ぜひ必見のことよろしくお願います。

### (以下詳細)

・**験道**：験道は自ら修して、自らその験しを得るところに真髄があるといわれます。修すると

は、役行者の教えの道を歩むことです。つまり、自らの身体で体験し、その精神を高めていくという事であり、**自らの心の高まり(菩提心)**と**とり**を得ることに他なりません。深山幽谷に分け入って、命がけの修行をし、霊力、験力を開発する道と言えます。

**役小角**へ**役行者**、**役行者神変大菩薩(えんのぎょうじゃじんべんだいぼさつ)**…日本の正史『続日本紀』によると役行者は634年に誕生。名は小角(おづぬ)といい、幼少の頃より葛城山で修行するなど山林修行や苦行の末、金峯山にて金剛蔵王大権現を**感得**(自分の祈りによって出現させて、得たこと)され、験道の基礎を開かれたと伝えられている方です。やがて修行の高まりと共に、強固な精神力と、煩惱を克服した境地に達し、呪術家としての名声は天下に知られる様になった。尊像の多くは、折伏した2匹の鬼(前鬼・後鬼)を従えた仙人風の姿で祀られています。千百年忌にあたる1799年(寛政11年)に光格天皇より、神変大菩薩の諡号が贈られました。さまざま**靈験力**(超人的能力)をもっていたとされる伝説的人物なのです。

**蔵王権現**：権現とは、権(仮り)に現われるという意味で、(金峯山寺では)お釈迦様をはじめ、千手観音や、弥勒菩薩が権化されて、過去・現在・未来の三世にわたる衆生の救済を誓願して出現されたとされています。インドや中国起源ではなく、密教彫像などの影響を受けて、日本で独自に創造されたものと考えられている。

**大峯山上ヶ岳**：世界遺産に登録された、女人禁制の修行山道(大峯奥駈道)をおみねおくがけどう)を抜けた山頂の事を言います。

合掌 副住職 谷川寛敬

